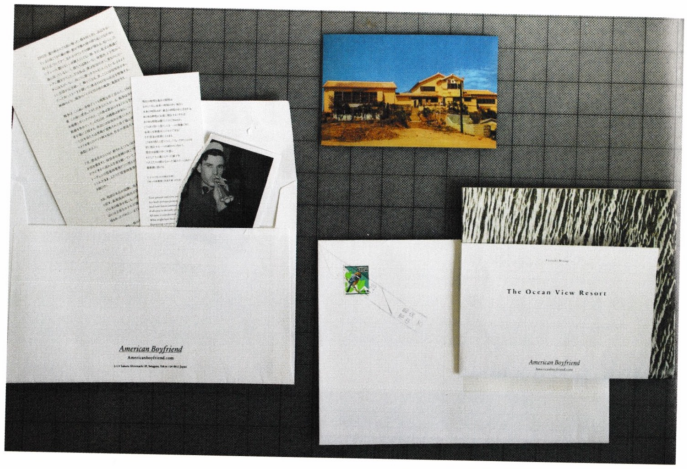
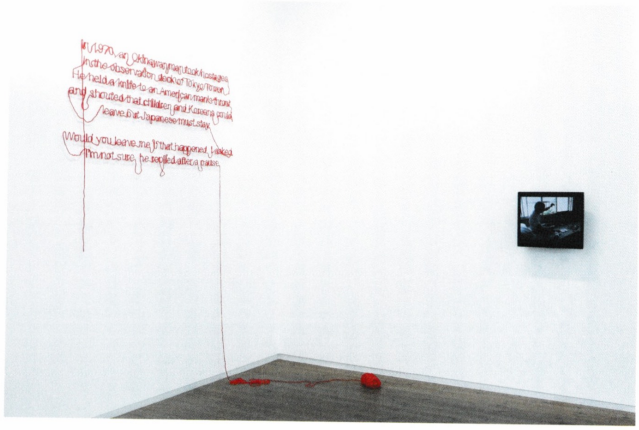


《American Boyfriend Printed Ephemera》2013年　作家蔵
American Boyfriend Printed Ephemera, 2013, Artist Collection

ミヤギフトシ
MIYAGI Futoshi
(1981 −)

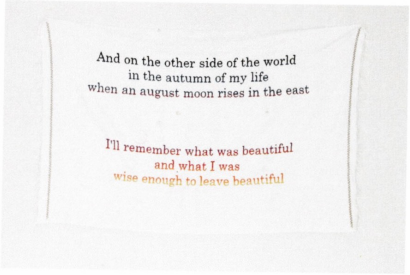
沖縄県生まれ。東京都在住。留学先のニューヨークにて、美術関連書籍の専門店に勤務しながら制作活動を開始。自身の記憶や体験に向き合いながら、国籍や人種、アイデンティティといった主題について、映像、オブジェ、写真、テキストなど、多様な形態で作品を発表。2017年4月に初小説「アメリカの風景」(「文藝」2017年夏号)を発表。アーティストランスペースXYZ collectiveの共同ディレクターを務める。主な展覧会に、「Almost There」(2017年、フィリピン大学付属ヴァルガス美術館、フィリピン)、「あいちトリエンナーレ2016」(2016年、愛知芸術文化センターほか、愛知)、「六本木クロッシング2016展:僕の身体、あなたの声」(2016年、森美術館、東京)、「日産アートアワード」(2015年、BankART Studio NYK、神奈川)、「他人の時間」(2015-16年、国立国際美術館、クイーンズランド州立美術館ほか、大阪、オーストラリア)「How Many Nights」(2017年、ギャラリー小柳、東京)などがある。その他、文芸、美術媒体への寄稿も行う。

Miyagi was born in Okinawa Prefecture and currently resides in Tokyo. He began his career as an artist while working in a bookstore specializing in art-related publications, during his time studying abroad in New York. Miyagi deals with his own memories and experiences to create work on nationality, race, and identity, presented in various forms such as video, objects, photography and text. In April 2017, he published his first novel *Amerika no Fukei* (Scenery of America, *Bungei*, Summer 2017). The artist also co-directs the artist-run space XYZ collective. Major exhibitions include *Almost There*, Jorge B. Vargas Museum, University of the Philippines (2017); Aichi Triennale 2016, Aichi Arts Center and other venues (2016); *Roppongi Crossing 2016: My Body, Your Voice,* Mori Art Museum, Tokyo (2016); Nissan Art Award, BankART Studio NYK, Kanagawa Prefecture (2015); *Time of Others*, The National Museum of Art, Osaka/Queensland Art Gallery, Australia, etc. (2015 – 2016); and *How Many Nights,* Gallery Koyanagi, Tokyo (2017). Miyagi also contributes his writing to art and literary media outlets.



《東京と、タイムマシンと、》 展示風景　1970/2016年　作家蔵

Tokyo, Timemachin, and..., installation view, 1970/2016, Artist Collection

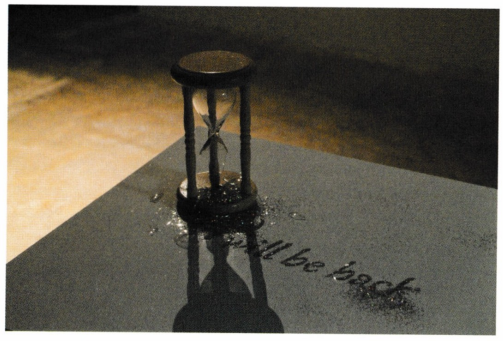


《Banner from The Teahouse of the August Moon 》 2013年　作家蔵

Banner from The Teahouse of the August Moon, 2013, Artist Collection

《The Ocean View Resort》 2013年　作家蔵

The Ocean View Resort, 2013, Artist Collection



《Broken Sandglass》 2013年　作家蔵

Broken Sandglass, 2013, Artist Collection

海辺の記憶

ミヤギフトシ

Yは海辺の家に住んでいた。たしか中学三年、夏休みの終わり頃、彼の家の庭で夕方からみんなで集まってバーベキューパーティーをしたことがある。片付けを終え、ブルーシールのバニラアイスを食べながらふたりで浜辺まで歩く。他のみんなは先に行ってしまっていた。太陽は島の反対側に沈むから残念と彼が言って、アイスがのった薄い木製のスプーンを口に運んだ。そういえばふたりきりで話すのはいつぶりだろうかと思い出そうとしながら、僕はその横顔を盗み見ていた。海辺では友人たちがぼんやりと黄金色に染まる海を眺めていた。

間も無く風景は色彩を失い始め、夜になった。この辺には夜黄色いロープが海から伸びてきて人を海に引きずり込むらしいとか、浜辺のアダンの木は夜しくしく泣くらしいとか、一通り奇譚めいた話が終わり、戦時中この浜に数人のアメリカ兵が漂着したらしい、と暗闇の中で誰かが言った。いや、それは日本兵だったはず、と別の誰かが答えた。その、兵士たちはどうなったの？　僕は聞いた。島が戦争に巻き込まれないように暗躍して、英雄になったって。それから？　その後は、わからない。僕は、波音のする方に顔を向けた。ぼんやりと波が怪しげに光ったように見えたけれど、すぐに消えた。誰も気づいていない。気のせいだったのだろう。

子どもの頃、僕の生まれた島は戦争の影響を受けなかったと聞かされていた。最近になって調べてみると被害は少なかったものの空襲も受けていて、そして駐留していた日本兵がずいぶん酷いことをしたようだ。しかし、家族や親戚、教師たちからそのようなことを知らされた記憶はない。身近なひ

とたちの深い傷跡が癒えるようにと過去を隠してきたのかもしれない。沖縄戦時、浜辺に漂流した兵士たちも確かに存在したようだった。沖縄戦が終わる少し前に、沖縄本島から漂流してきた日本人の逃走兵。僕はいくつかの資料を手がかりに、この逃走兵たちの存在について知りはじめている。

私はいつの間にか意識が朦朧としてきた。ギラギラ光っていた夜光虫の群れがやがて大きくふくれあがったかと思うと、間もなく髑髏の群れとなって舟のまわりをとり巻いた。髑髏たちは口々に「お前は俺たちを見捨てて逃げて行くのか」と罵った。[*1]

逃走兵たちは、夜の嵐を抜け島の浜辺に打ち上げられた。数日後にその浜辺にアメリカ軍が上陸し、米軍の活動拠点と収容所がつくられた。逃走兵のうち何人かは自らの意思で捕虜となり、何人かは米兵と駐留日本兵とのゲリラ戦に巻き込まれる形で銃殺された。もしくは、駐留日本兵にスパイ容疑をかけられて殺されてしまった。収容所が建てられた浜辺はYの家のそば、僕たちがいつかブルーシールを食べた場所だった。Yはその歴史について知っていたのだろうか。

その浜辺に、成人式のあとの夜旧友らと一緒に出向いた。みんなと会うのはとても久しぶりだった。夜の砂浜はあの時のように真っ暗で、波の音だけが大きかった。誰かが砂浜のまんなかで焚火を始めた。僕は少し寂しげな火から離れて、水辺で砂をいじっていた。手を柔らかい砂にもぐらせると青白くわずかに発光するなにかが出てきて、手のひらに載せると、ぼうっとすこし強い光を発した。暗くてよく見えないけど、生きている。僕は驚いて近くに立っていた誰かに、夜光虫だ、と手のひらを差し出した。Yだった。彼は夜釣り用の浮き輪だろうとなぜか気の無い返事をしてビールをあおった。オレンジ色の炎を背後に青白く浮かび上がる、沖縄の人間らしくないさらりとした横顔に僕は一時期たしかに夢中だった。誰かがMDプレイヤーと携帯用スピーカーで一昔前の物悲しいアメリカ音楽を

*1　渡辺憲央『逃げる兵――高射砲は見ていた』（二〇〇〇年、文芸社）

流しはじめた。僕は冷たい水に手を突っ込んで光る何かを海にかえした。その年の春に僕はアメリカの大学に進学することになっていた。島にも当分は戻って来れないだろう。

作業中数人の米兵が私たちをとり巻き、「トウキョーバーン、オーサカバーン、ヨコハマバーン」と口々にいった。日本中の都市が爆撃で焼かれたことを私たちに知らせようとしているのだとわかった。また戦艦大和が撃沈されて、日本には軍艦も飛行機もなくなったことを知っているか、と何度も訊いた。作業が終わると、私たちを椅子にかけさせてラジオのダイヤルを回した。ラジオからは日本の流行歌が流れてきた。「潮来出島に咲く花は　噂ばかりで散るそうな　同じ流れを行く身なら　泣いておやりよ真菰月」。懐かしい女性歌手の唱声が胸にジーンときた。米兵は私たちに、「東京ローズを知っているか」と何度も訊いたが、何のことかわからなかった。[*2]

僕が生まれた島の浜辺、収容所にいた日本兵がアメリカ兵たちとともにラジオを聞いていた。日本のラジオだ。米兵たちが夢中になっていた東京ローズはどんな曲をラジオで流していたのだろうか。東京ローズとは、映画『リリー・マルレーン』のハンナ・シグラのような存在なのだろうか。劇中、シグラはハーケンクロイツの前で「リリー・マルレーン」を歌い、そのシーンだけいまでもよく覚えている。その歌は、ララ・アンデルセンやマレーネ・ディートリヒが実際に第二次大戦中に歌い、兵士たちの心を安らげたという。当時日本のラジオで、この曲が流れたことはあったのだろうか。

兵営の前、門の向かいに
街灯が立っていたね
今もあるのなら、そこで会おう

*2　前掲書

また街灯のそばで会おうよ
昔みたいに　リリー・マルレーン
（中略）
もう長いあいだ見ていない
毎晩聞いていた、君の靴の音
やってくる君の姿
俺にツキがなく、もしものことがあったなら
あの街灯のそばに、誰が立つんだろう
誰が君と一緒にいるんだろう[*3]

ゲートがふたりを分かつ。音楽はこちら側と向こう側の境界をふわりと飛び越えるかもしれないけれど、人間たちは音楽のなかでいつまでも引き裂かれたままだ。それは少し、残酷でもある。「リリー・マルレーン」を聞いて、何となくモーリス・ベジャールのバレエ作品『恋する兵士』を思い出した。YouTubeで検索するとジョルジュ・ドンが踊る映像が出てきて、踊りの前に誰かが「滅びゆく者たちの最後の踊りだ」と叫ぶ。恋する兵士は何時だって美しく、それは彼が滅びゆくからにほかならない。どれだけ陽気に踊っても、この兵士は死んでしまうのだろう。「リリー・マルレーン」の兵士のように。この曲も、第一次世界大戦の兵士の初（そして最後の）恋相手を思う気持ちを歌ったものらしい。

恋する兵士に感情移入してしまうことは危ういことで、兵士の周りではやし立てる人間たちも残酷だ。それでも踊るドンは美しい。子どものように喜びと悲しみを爆発させている彼を見て、またYのことを思い出す。中学三年の頃、バスケ部の練習が終わった中庭、友人がもってきたCDに合わせて上半身裸で即興のダンスを踊るY。何事かと野球部の男子も覗きにくる。顧問の先生は陽気だねと笑

*3　LILI MARLEEN
Musik & Text : Norbert Schultze / Hans Leip
© by Apollo-Verlag Paul Lincke GmbH (Universal Music Publishing Group)
Right for Japan controlled by Universal Music Publishing LLC.
Authorized for sale in Japan only

い、女子は誰も相手にしていなくて、薄やみのどこかで夏の虫が鳴いていた。男子が何人か加わり、輪になってはやし立てる。僕は部室のドアにもたれてその光景に見とれていた。全員入部制の学校には野球部とバスケ部しかなくて、嫌々バスケ部に入っていた僕は練習が終わる度にこの上ない開放感を覚えた。疲れた体から汗が乾いて体が少し軽くなり、束の間の自由を味わう。三年生になってもうすぐ部活も終わる。Yを目にする時間も減ってしまうのだろう。僕は那覇の高校に進学することを考えていて、Yは島の学校に進むらしい。Yが僕のところにやってきて踊ろう踊ろうと手をひいた。僕は驚き、いやだと笑ってその手を払った。照れてる、そう言ったあとYは両手を広げて回転しながら中庭の中心へと戻っていった。夜が急速に近づき一幕の終わりのように帳をおろした。

通っていた中学校の音楽室にはどこの中学校の音楽室にもあるようなベートーヴェンの肖像が貼られていて、どこの中学生でもきっとそうするように、ベートーヴェンの両目には金色の押しピンが刺されていた。そして僕たちは、第九や第五交響曲を聴いてはその大仰さに吹き出しそうになる。第二次大戦中にもベートーヴェンは色々な国で色々な思惑のもと演奏されていたようで、連合国は交響曲第五番を勝利の歌とし、日本には実話をもとにしたと言われる『月光の夏』なんて小説もある。ヒトラーの誕生日を祝うフルトヴェングラー指揮による交響曲第九番演奏会の映像がYouTubeに上がっている。つまり、あの戦争時、ベートーヴェンの音楽はどの国でも演奏され、ラジオから流れる可能性があった。たとえば終戦後、島に上陸した米軍のラジオからもベートーヴェンが、弦楽四重奏の十五番なんかが流れていたのかもしれない。そして、フェンス越しにアメリカ兵と日本兵が束の間の交流を持ったかもしれない。一九五〇年代のアメリカ映画『八月十五夜の茶屋』のフィズビー大尉の言葉のような、美しい言葉が、交わされたのかもしれない。映画の後半、ロータス・ブロッサムはアメリカ人大尉、フィズビーに、私をアメリカに連れて行って、とお願いする。彼はそれを優しく断り、静かにこう言う。

この世界の反対側で、僕の人生が秋色に変わるころ
東の空に、八月の月がのぼるでしょう
忘れないよ、その美しさ、
その美しさを、そのままに残し、去った僕の選択を[*4]

その言葉は、ふたりの言葉の橋渡しをしていた沖縄人通訳サキニ（マーロン・ブランドが沖縄人を演じた）によって、ロータス・ブロッサムに伝えられる。サキニはその美しい言葉をなぜか完全に訳さずに、ただ、「忘れないよ」とロータス・ブロッサムに伝える。詩のような言葉は、「通訳という境界的存在[*5]」であるサキニの心にとどめられることになる。ロータス・ブロッサムが去ったあと、サキニはフィズビーに言う、僕を代わりに連れてって。フィズビーは笑い首を振る、だめだよ、と。

そのあと僕たちが見る夕焼けは、すべて「ゴールド・フィールド」になった[*6]。

二〇一三年十月。島に帰った。両親はちょうどその時期兄家族と共に東京旅行に行くというので実家には誰もいない。それならばと、ずっと泊まってみたかった海辺のリゾートホテルに宿泊することにした。実家から歩いて十分で行ける場所にあるのに、そういえば一度も泊まったことがない。Yの家からも歩いて数分の場所にある。旅行者のふりをしてチェックインしても、つい島のなまりが口を出る。部屋に入って、窓の向こうに広がる海が目に入る。見慣れたはずの海も、三階の少し高い場所から見ると新鮮だった。ずっと昔アメリカ軍がこの浜辺に上陸して、収容所が作られた。それを想起させるようなものはない。

昼寝をして、ビーチを散歩した。台風が近づいていて風の強い砂浜は人影もまばらで、空には厚い

＊4　Daniel Mann, *Teahouse of the August Moon*, 1956, MGM

＊5　新城郁夫『沖縄を聞く』（二〇一〇年、みすず書房）

＊6　Felix Gonzalez-Torres, *1990, L.A., The Gold Field*, Julie Ault (Ed.) Felix Gonzalez-Torres, 2006, Steidlangin

雲が広がっていく。僕はついYの姿を探すけどいるはずもなく、すぐに海にも飽き、部屋に戻った。夕方、一瞬雲が薄くなってレースカーテンの向こうで海が金色に染まる。ゴールド・フィールドだ、と僕は思う。島にいた時は気に留めていなかった景色。間も無く夜がきて、目の前の風景も闇に覆われるはずだった。

アメリカに住んでいたころ、『Old Joy』という映画を観た。原作はジョナサン・レイモンドの短編小説で、書籍のカバーや中ページの至るところにジャスティン・カーランドの写真（深い森のなかに佇む裸のひとびと…小説も彼女の作品から着想を得たそう）が挿入されていた。ケリー・ライヒャルトによって映画化され、好きなミュージシャン、ウィル・オールダムが主演していると知った僕は、劇場に観にいった。

映画は、ヒッピーかぶれの自由人カート（オールダム）ともうすぐ父親になるマーク（ダニエル・ロンドン）という親友ふたりがオレゴンの山奥にある秘境の温泉を目指す短い旅を描く。ふたりは森で迷い、キャンプをし「いっしょのテントで寝てもいいかな」、そして温泉を見つける。マークは将来の不安に押しつぶされそうで、カートはただ彼の側にいて、時々ふれあう。見つけた無人の温泉には、木でできた別々の湯船。リラックスして…。カートは湯船から出て、お湯に浸かって目を閉じているマークの肩をマッサージする。『ブロークバック・マウンテン』ともまた違う、男ふたりの、性的にもどこか曖昧な関係性を描くこの映画について、New York Timesにはこう書かれている。

（レイモンドは）フリー・ラヴや近年のRiot Grrlフェミニズムの流れを汲んだともいえる、この地方特有の「柔らかな男性性」に惹かれたという。『Old Joy』は、いかにこの繊細な男らしさが、まわり回って受動的攻撃性になりうるかというねじれを描く。[*1]

*1 Dennis Lim, *Change is a Force of Nature*, 2006, New York Times

今では内容もあまり覚えていない。しかし、この映画の断片が記憶に留まり続けている。『ブロークバック・マウンテン』と時期を同じくしてリリースされ、何となく似たテーマを持った作品だったからかもしれない。またはこの映画が、僕の大好きなオールダム（＝ボニー・プリンス・ビリー）の曲「I See A Darkness」とつながる部分があったからかもしれない。この曲を聞くと、僕はある夜のことを思い出す。

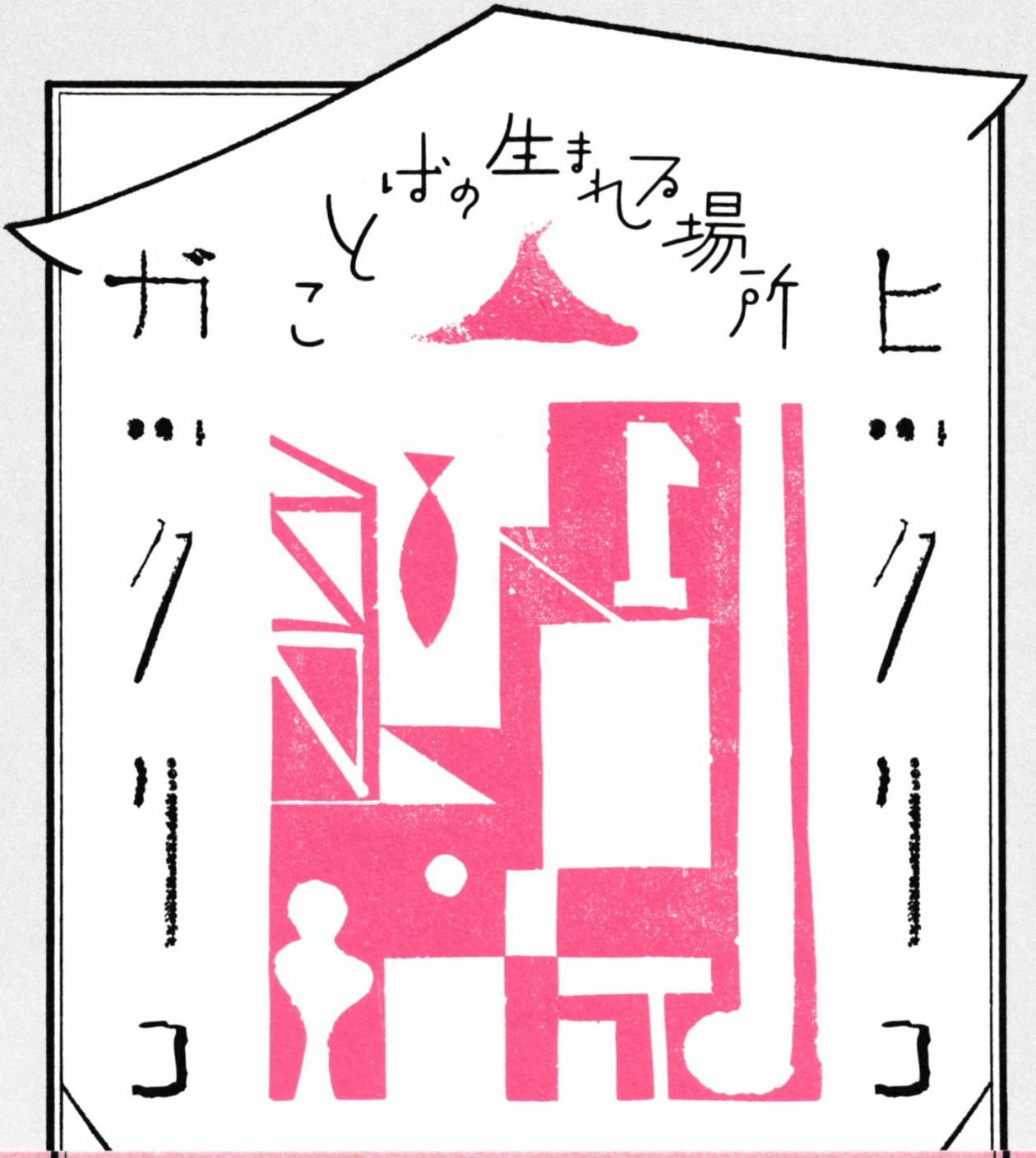
中学生の頃、夏の夜にYが自転車で僕を家まで送ってくれた。学校裏の丘、街灯もほとんどないような暗い坂道、Yは息をたてながら自転車を漕いでいる。僕はその後ろで、彼に触れないように荷台のポールを後ろ手に握っていた。目の前にはYの白いシャツの背中、森、星空、カーブを描く舗装道路が伸びていた。もうすぐ墓地の前を通るから目を閉じて、Yの声を風が運ぶ。幽霊見たらマブイ落とすよ！　この年になってまだそんなことを言っている。それでもやはり少し怖くて僕は目を閉じる。暗闇を見る。そっちは、目を閉じなくていいの？　と闇の向こうにいるYに、僕は聞く。俺は大丈夫、彼が答えた。僕はポールから離した両手を闇の中に広げた。風の音が少し変わり、山頂に着いたことがわかった。まもなく逆風が吹き、オーデコロンの匂いを感じると同時にバランスを崩して、僕はあわててYの肩に手をかけた。その肩がびくりと動き、Yが鋭い声を出した。僕は目を開いた。カーブの向こうに、見慣れた集落の光の列が見え始めていた。もう少しで、光のある場所につく。

例えばいつか　僕たちの心は穏やかで
たとえ一緒にいられなくても
ふたりとも結婚していても　ひとりきりでも
夜遊びはやめて　微笑みは心のなかで
永遠に消えることなく　眠ることすら忘れて
君は僕の汚れなき兄弟だから

でも　また見えてくる
だめだ　僕はまた暗闇を見る
僕は暗闇を見る　暗闇を見る　暗闇を見る
なぁ　君をどんなに愛したことか
待っててもいいかな　君が　君が僕を
この暗闇から連れ出してくれることを[*∞]

http://americanboyfriend.com/より抜粋／加筆・修正

＊∞　I SEE A DARKNESS
words and Music by Will Oldman
©by ROYAL STABLE MUSIC
Pression granted by FUJI PACIFIC MUSIC INC.
Authorized for sale in Japan only



◉掲載作家

オノ・ヨーコ
河口龍夫
鈴木ヒラク
萩原朔太郎
福田尚代
ほか

◉テキスト

石川九楊
谷川渥
平川克美
王舟
文月悠光
ほか

二〇一七年
アーツ前橋、前橋文学館
共同企画展

ヒックリコ
ガックリコ
ことばの生まれる場所
コンセプトブック

ことばは、かたちを変えて生き延びようとする。
絵画の中で。写真の中で。彫刻の中で。文学の中で。

左右社

『ヒツクリコ ガツクリコ ことばの生まれる場所』

２０１７年１１月１日 初版発行 P104-116